

## 幼兒に對する私の愚見

熊代 豊

人間がこの物質界に倦怠してきた時に、常に求めるのは心の世界、精神の世界、自己自身の世界、それでごいませう。極端な物質の世界からも、此頃はだん／＼と盛に、人格とか、心とかいふ言葉が聞えてまゐりました。さて、其の實際は果してどう進行してゐるか。

近來、學問は非常に盛になつてまゐりまして、智を求める熱が著しく高まつてまゐりました。これは一つに望ましい傾向と云はなければなりません。けれども私共は單にこの智ばかりで完全な人格者になる事は出来ないだらうと存じます。ほんとうに立派な人格者とは智のみ發達した人ではない、道理のみに明るい人ではない、寧ろ其人自身に尊い、そして高い内的生活が無くてはならないと存じます。もつとも、純粹の科學者の中にも、科學其のものゝ中に無限の世界を見出して、自分は科學者として人間なりと云ひ得る人もありませう。然しながら自分の、

情の力すべてさへもが、この中に満足し得るの狀態に達するまでには、其の人は餘程、科學其のものが自身の獻身的の仕事とならないではなりません。

ところが事實世間には、そう誰も彼もが科學者である事は出来ません。寧ろそうでない人が大部分でございませう。そうすると極く僅かの人を除く外は何によつて自分の衷心のよろこびと憩ひを得る事が出来ませうか。私も亦、ある一部の方と共にこゝに藝術の必要をとなへたいのでございませう。

藝術とは何であるか、今更に定義する餘裕を持ちませぬ。藝術、一口にはいふものゝ、其の形は色々でございませう。即ち、詩もあれば、繪畫に、彫刻に、吾等に何んといろ／＼あると思ひます。がとにかく「眞」と「美」を物語る藝術、その藝術の中に一寸なりとも這入る事の出来た状態は頗る尊い清い高いものだと思ひます。人生の無情を歌つた詩も、これに共鳴して泣く心も、すべて利害を離れた無垢の心狀

だと思ひます。

前提は大變長くなりました。私の云はうとする事は、であるから、私共はかういふ状態を味ひ得なければならぬが、又それと同時に、この點に於て教育は幼児期からこれが注意をおこたらないやうにしなければならぬといふのでございます。一個人の性質は決してこれが後年の修養にのみよつてどうにもなるものではないと思ひます。此時期に於る教育の仕方は、遂にその幼児をして一生ある幸福を知らないですごさせる事にもなるでせう。例へば幼さいときから眞に音楽がきらいであつて、音さへ聞えないやがつて泣き出す等といふ子供は殆んどございますまい。それなのに父母の頑固な主義は或は後天的に、其のものゝ愛好心を傷つけ、抹殺して丁ひます。若しそうでない場合には、それが爲、大なる幸福の得られるものも、むぎ／＼と其の幸福さへもふみにじられ、葬られてしまふといふ事も少なくはございますまい。一體に外國の子供は音楽がすきで、上手であるといふのは、其の子のそういふ生れつきである以上に、其の子を教育する人に俟つ所が大である事は誰しも疑ひを容れぬ事實でございませう。

さて、では幼児に對してはこれ等のものをどういふ風にして授けたらよいか、こゝに種類即ち、幼児に最も適當したものを選ぶ必要が起つてまゐります。前にも例として出しましたが、私はこの幼児に最も適したものとて音楽をあげたいのでございませう。詩は言葉が無くては味はれませう。線や形は又同様にやゝ困難なところがございませう。單り音は、そして音ほどに自由に、且つ早くから感じられるものは無いでせう。色は目を閉ぢれば見えませぬ。音は夢のまに／＼さへもこれを聞く事が出来るではありませんか。更に申しますと音ほど小さい子供の心底に容易に搜入するものはないと存じます、まづ幼児の前で美しい笛の音を一吹してごらん下さいませ。いやがる子供は恐らくございませう。又特別に身體上に故障の無い限りは皆快いおも／＼で近よるでせう。私はあるおとなの人で、私はせめて草笛でも吹けたらどんなに幸福だらう、といつていらしたのを聞いた事がございます。もつとも、この人のこの言葉はたゞ音を聞くといふのではなくて、其の心には更に深いもの、即ち、自分の呼氣がかうも美しい振動をしながら、再び自分の耳には入つてく

る、創作と鑑賞の二つの複雑な氣持の繰り込まれてゐるものでせう。けれども其の音を愛好する心持、又其れによつて其の瞬間の快い満足の状態を得る點に於て何等異つたところはございますまい。大人の心をこれだけに動かすもの、すべてのものを自由にありのまゝに受入れる事の出来る時期、この幼児期で私はこの點に於て先づ第一に音の世界を幼兒に味はせたいと思ふのでございます。

音樂は極く初歩はどうしても音そのものから入らなければ本當のものではないかと存じます。これがやゝ進んでまゐりますと、其の音のだんだん變化する事、高くなつたり低くなつたりする事、尙進んでは、それが一つの曲の形によつて聴取さるべきものでございませう。幼稚園の時代が恰度其の曲へ入り初めの時ではございませうまいか。

さてでは其の最初音なるものはどういふ風にしてこれに親しませたらよいか、この爲には先づ最初に、美音を出し得る玩具を尙よく撰擇して授ける等はよい事ではないかと存じます。同じく鈴とはいへ其の音色はいろ／＼でございませう。涼しい音もあれば

暑くるしい音もあり、細かい振動をするものもあれば、やかましく雑然となるのもございませう。尙其の他樂器等は餘り大した都合の無い限りは自由にこれを使用せしめて、自分で音を出させてみる等はよい事と存じます。

曲を興へるやうになりますと、其の選擇は音以上に注意を要する事と存じます。幼兒は音曲のすき嫌ひだとか、そのよしあしだとかはまだこれを考へる時ではございませぬ。でございませぬから、とにかく人の歌ふものは何でも歌はうとし、教へるものは何でも熱心に歌ひます。けれども一つにはこれが又大變危険でございまして、もし、幼兒たちがよく歌ふからと云つて、たゞそれが生理的快感である事を忘れて、氣に乗る時は、大變な失敗に陥る事と存じます。人間の尊い趣味性は肉體的のものではなくて精神的、靈的の欲求より始まるべきものであります。で此時代の教育が現在と共に、彼等の將來からみて後悔する事なからしめんとするならば、又同時に將來の趣味性の源泉として、美しいものをたくさん授けるやうにしないではないかと存じます。單に歌ふの快感だけでなく、其の「美」に、知らずなが

らも感じさせる事は後々の彼等をしてより強い欲求と、其より深い感動の原因となる事でございませう。人の趣味性は之を一朝一夕にどうともする事が出来ないと同様に又、長い期間の、周到なおこたりのない注意をもつて始めて築きあげられると思ひます。同じ繪畫でも、私共がもしよいものばかり見せられたならば、いつの間には繪畫はよいものだ尊いものだといふ感じを持つやうになり、同時に繪畫がすきにもなるでせう。眞によい詩は一度讀んでも何かしら高遠な域に人の心をひいてゆきます。これが度重なるにつれて詩はよいものだ、詩はすきだといふ風になつてまゐります。これに反してよくないもの、價値の無いものを興へる事になりますと、たとひ其の人はよいものによつては愛好を起し得る人でも、其の愛好の動機を興へられないもので、遂には不幸にも、よいものに對しても何等これを受け入れる準備を持たないといふ風になり、注意を拂はなくなつて、遂に其の道は私にはわからない道だと大びらに云ひふらす様になります。幼時期に於ける趣味性の毀損は實に後年をだいなしにして丁ふ事にもなるでせう。美への第一歩をふみ損じさせたらば、或は其

の子供は後々決して健全な趣味に生き、美しい内的生活を有する人となる事は出来ないと思ひます。

この點に於て、私はこの立端からも、この音樂の初步の教育に大なる意義を見出すのであります。

ではその選擇の標準、或は目標には一體何をおいたらよいか、眞と美を核にして創造される藝術の一部は、やはり其の眞と美を常に忘れてはならないと存じます。私共の音樂教授は、すべて道德の向上ではない、更に／＼高い立端から多くの事を要求してゐるのだと思ひます。でありますから其の歌曲は歌ふ子供の心に忠實なものでなければなりません。と申しますのは、大人が物にあき形にあいていろ／＼と工夫し、ひねり出し、やうやつと構成した變化極りない複雑なものなどは却つて子供らの心には不自然なものである事が多うございます。子供には、其の節を幾度も幾度も歌つてゐる中に漸つてその奥底からおもしろさのにじみ出るやうなものであつてはいけません。其のメロデーは自ら兒童のおとぎの世界そのものであり、龍宮のおとぎ様の舞ひおどるそのものでなくてはなりません。けれどもこれだけでもつて充分であるとは申しかねます。何となれば

ば例は純日本式のものゝやうに一寸聞いては涙の出るやうなきれいなメロデーをもつて居りますがかういふ風のものにはやゝ勝氣の失はれてゐるものが多くございましてこれだけでは音楽の長所をすべて發揮する事ができませんから。こゝに於てメロデーのよいのを選択すると共に、全般に亙る音楽の特價を失はないやうに授けるには尙これに補はれるものが無くてはならないと存じます。がとにかく、其の旋律がよく子供の心に浸入し得るものであつたらば、始めて幼童は心身全體をさゝげてこれを歌ふ事になるでせう。これで始めて歌ふ事の快さが、意識しないながらも幼児の心のどこかに感じられる事と思ひます。子供は歌はせられ、ば何でも歌ひます、或は教へる人以上に氣をきかせて元氣よく歌ふでせう。けれどもこれは單に子供の氣轉にすぎないか、又は元氣まかせに、若しくは叫びたい本能の満足の爲に呼ぶのであつて、かういふ状態の結果、子供は決して歌がすぎなものとなる事の出来ない事は勿論、歌から得られる美しい世界等は何等與へられないでございませう。貧弱な無味乾燥なメロデーは必ず知らずゝの中に子供の趣味性を破壊し、後年

をして音楽に冷淡ならしめるものでございます。

叔前に申上げました補ふとは一體何であるか。與へらるべき歌曲はなるべく完全なものとしてこれを授けなくてはなりません。一方に於てよりメロデーを授けると共に又リズムの快い進行を氣分に知らせ其妙味を感じさせなくてはなりません。その爲にはあの元氣よい子供の心の鼓動が自ら其のリズムの中におどりこむ事の出来るやうにあらせなければなりません。音楽の主要素であるリズムは殊に初歩の音楽には大切なものであつて、其の鮮かな律動的の流れはよく幼児の氣持をひく事が出来ます。律動遊戯は最もこのリズムの鮮やかに表現されたものであり、其のリズムが更に動作を伴つたものでございます。唱歌におきましても、著しく律動的のものは尙これに簡單な筋肉の運動を入れる事によつてよく快いものになつてまゐります。どちらかと云へばメロデーはしんみりと聞くべきもので、リズムは今少し積極的に聞く人の胸扉をたゞいてまはるといつた風のものでございませう。この容易に心を躍らす分りに就ては、又出来るだけ其の價値を生かし、其の特質をはつきり所有してゐる曲をも選擇して、時々

これを授けなければなりません。又このリズムの特質は、通常伴奏によつて其の現れが多少より鮮かに、より著しくなるものでございます。たとへば、曲だけではさほどにも飛びつかないものでも、このにぎやかな音が、高く低く、強く弱く進行する時は、自ら心の歩みをうながします。其の點に於て教へる人は更に、この伴奏にも、よく注意して、相當によいものを選択し、其の弾き方も、やたらにこれをたゞきつけないやうにして、充分に其の曲の心持ちを表現するやうにつとめなければならぬと思ひます。

唱歌を教へる事は、一見何でもないやうに考へられますけれども、實際は、それについては多くの考慮と研究のされなければならぬやうに残されて居ります。そしてかうする事は單に幼兒期を最も樂しくあらせる爲ではない、現實世界にのみ生きる人でない人、その人を作り、其の人たらしめるの第一歩としての方法。宗教にせよ藝術にせよ、とにかくに、生の尊さ、生以外の尙尊きものを、しんみりと味ひ、よろこび、敬ひ、或はそうした深い生活を爲し得る心を毀損しないやうにしやうとする爲には、私共はかういふ細かい事にまでも、細心の注意をお

こたらないやうにしないでならぬと存じます。幼兒を清らかな世界に歸らす事、又其の清らかな世界を創造するやうにさせる事、其の方法はいろいろ他にもございませうが。又最もこの時代に或は其れ以前から容易にふれ、容易に味ふ事の出来る「音」によるもの、この「音」によるものゝ爲にはなほより多くの注意と、大なる價値をあげんが爲の努力とを充分にそゝぐべきではないかと存じます。